

## 第四十三章 社会的動物

複雑な言語体系を持った人間は、大脳を発達させた。他の動物から身を守り食糧を確保するために、徒党を組まざるを得ない。そうするとリーダーが必要になる。慕われてリーダーになるうちは良かったが、リーダーの権限が輝き出すとその輝きを欲しがるために、策略を巡らして「頭領」になろうとする者が現れる。社会が形成され権力者が出現する。権力者の思考体系によって社会に色加わる。

資本主義社会。その色は資本色。お札の色は様々。

共産主義社会。なぜか赤色を連想する。

民主主義社会。多数決で絶えず物事を書き換えることができるから白紙。白色。

独裁主義社会。独裁者が色を決める。

\*

「あーあ。もう疲れちゃったわ」

イリがサジを投げる。

「網を持って昆虫を追いかけられる方がよっぽど楽しいか、よく分かったわ」  
榊が口を滑らせる。

「やっぱりノロが恋しい」

イリの表情が急変する。

「ノロは弟よ。恋人じゃないわ」

何かと口うるさかった長老はしばらく自重していたがここで失言してしまう。

「美しき兄弟愛じゃ」

「愛じゃないわ」

イリがむつとする。イリの怒りを収めようと加藤が介入する。

「ソシアのウクライナー共和国への軍事侵攻を何とかしなければと地球に来たが、グレーデッドが踏ん張っている。事を荒だけないようにうまく介入している」

加藤の言葉にイリが落ち着きを取り戻す。

「グレーデッドは鯛湾問題にも目立たないように介入しているわ」

イリの言葉を受けて榊が続く。

「そのほかにもグレーデッドは紛争を収めようと静かに争いの收拾に動いている」

イリの表情がパッと明るくなる。

「性的なやり方じゃなく、ゆっくりとじわじわとい方向へ誘導しようとしているんだわ」  
失言を挽回しようと長老が低い声で応じる。

「それがノロのやり方じゃ」

「グレーデッドの元閻將軍だったノロのやり方をマネしておるのじゃ」  
するとグレーデッドの元總統だったイリの眉間にシワが走る。

「總統だった私より閻將軍のノロの方が影響力を持つていたとでも言いたいの！ 所詮私は飾り物だったでも！」

長老が土下座しながら言い訳する。

「滅相ありません。イリ様がノロに影響を与えたのです。結局はイリ様の……」

加藤が間に入ろうとするが間に合わない。イリが長老を見据える。

「私は地球の事が心配になって宇宙戦艦でノロ惑星から地球に向かった。相談もしたけれど私よりも昆虫採集が大事らしく無視されたの！」

少し言葉に隙間ができたので加藤が再び介入する。

「それなりにノロは考えていたと思います。見た目の行動と違って彼の行動には深い意味があると思うのです」

「閻將軍の方が總統より偉いと言うことでしょ」

「そういう問題ではなくて……」

と言いながら加藤は言葉を切る。そして勇気を整えながらイリにまるで戦うように語気を高める。

\*

「なんだかんだと言ってノロはイリを愛している」

イリに口を挟む余裕を与えないように加藤が続ける。

「ノロにはノロの考え方があって、その考え方は高度で独創的で夢物語に近い事もある。彼は決してそれを理解して貰おうとは思わない。イリに対しても……」

ここで加藤の言葉に間が入る。同じくここでイリが機関銃のように反論しようとしたが榊がいつ用意していたのかイリの口元をチョコレートで封じ込める。

「ノロは根本的にはイリと同じ考えを持っている。でも彼は具体化する手段を求め続ける」  
チョコレートを丸呑みしたイリが反論する。

「私が具体化する手段を持ち合わせてないとしても！」  
何とか加藤が答える。

「そうではありません。今の地球を見てください。ソシアのウクライナーへの軍事侵攻問題などのようにして解決するのか。プチレンコン大統領を暗殺すれば済むのか」

イリの反転攻勢は強烈だ。

「目の前で何の罪もない市民がソシアのミサイル攻撃で死んでいるのよ」  
勢いは完全にイリの方にあるが加藤がなだめる。

「私は関東電力の福島原子力発電所の最高責任者でした。もちろん社長ではありません。かといって闇の社長でもありません。しかし、事件事故のすべてが私一人にかかりました。判断ミ

スが多くなかなかうまく対応できなかった。それでも部下は全員何も言わずについてきてくれた。でも褒められることはなく非難ばかりされた。責任を誰が持つのか。誰も持ちたがりません。結局私が持ちました」

イリの全身から力が抜ける。原発の近くに住んでいたと言うだけでどれだけの人が被爆して亡くなったのか。どれだけの人が避難を余儀なくされたのか。特にひどいのはそれまでの平穏な生活を有無を言わずに奪い取られたことだった。

「事故を起こした原発を跡形もなく瞬間的に破壊できるレーザー砲があっても何の解決にもならないんだ」

イリが加藤に頭を下げる。加藤は驚いて座り込んで腕を組んでうつむく。

\*

イリは宇宙戦艦をノロの惑星に帰す事を決断する。

「私は地球に残ります」

「待ってください！」

「私はイリ族の女王です。小さな国ですが女王として地球の平和を目指します」

「それは危険です。中華民国はイリ王国を中華民国の自治領だと主張しています。イリ王国と友好関係を結ぶ数多くの国が中華民国を非難しても『内政問題』と取り付く島がありません。しかもイリ王国に軍隊はありません。戻ればすぐに幽閉されます。しかも彼らはノロに恨みを

持っています」

加藤も袖も必死に止める。長老も涙ながら訴える。

「中華民国にとつてイリ王国は赤子の手をひねるような存在です。今は毒にも薬にもならない小国だからと干渉しませんが、イリ様が正式に女王に戻れば黙ってはいないどころか……」

独裁者は国家を私物化する。人間が社会的動物であることが結局独裁者を生み、自らを奴隷化する。特に個性が強い人間は一人一人の価値観が異なるが我が身かわいさで集団化しなければ生きていけない。そのためには強いリーダーが必要とする。人間を襲う動物や食糧の確保が最低限必要とされた時代だからリーダーは必死に働いた。その頃の人間社会はグループと呼ぶほどの小さな集団だった。

ところが集団は大きくなる。自然とリーダーを補助する組織という制度が生まれる。階級制度が誕生する。それは新しい制度と言うより階級社会という、社会的動物である人間の社会性の難易度を上げる。

個人主義であろうと社会主義であろうと人間は自ら進んで知識や知恵の奴隷になってしまう。